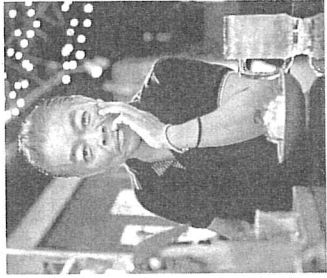


悼む

忘れ得ぬ神保町の「銀漢亭」

夕暮れ、ふらっと立ち寄りたくなる酒場はそう多くはない。かつて東京は神保町にあった「銀漢亭」は私の好きな「ふらっと酒場」のひとつだった。そのカウンターにいた主人が俳人の伊那男さんである。ダンディーな雰囲気似合おぬ気さくな語り口、そして飲んべえが喜ぶツアミのつぼを心得ていた。降りそそぐBGMは昭和歌謡。

俳句のまんま、信州は伊那谷の生まれ。大学を出て証券・金融の世界に入るが、バブルが崩壊し、設立した金融会社が破綻する。しばらく近所の寺の草むしりなどをして過ごし、古本屋街の裏通りに立ち飲みスタイルの酒場を開いたのは53歳のときだった。「脱サラなんてかっこいいんじゃない。ほろほろのていで狂乱の舞台から降りました」



＝小出洋平撮影

ほどなくして俳誌「銀漢」を創刊し、句集「然々」とで俳人協会賞に選ばれる。よく語っていたのが伊那谷ゆかりの井上井月のこと。幕末・維新を生きた異色の俳人、家も力ネもないが、こよな

く酒を愛し、放浪の日々のなかで秀句を残した。「俳句をやろうとしたとき、父が井月全集を送ってくれてね。いつも井月の生き方に思いをはせていました。コロナ禍のさなか、17年続いた「銀漢亭」の看板をあっさり下ろす。見れば、白いおひげ。「奥の細道みたいな旅がしたいなあ」。

閉店後、近江ひきの伊那男さんから小包が届いた。居初庵太著「花の歳時記」（淡交社）。居初はわかふるまご大津は堅田の人である。手紙が添えてあった。〈その縁といっただけでなく、美に役立つ本で、私はずっと座右に置いています〉。ページを繰りながら、伊那男流のちりめん山椒の味を思い出している。【委員編集委員・鈴木琢磨】

2025年11月14日死去・76歳

伊藤 伊那男さん 俳人